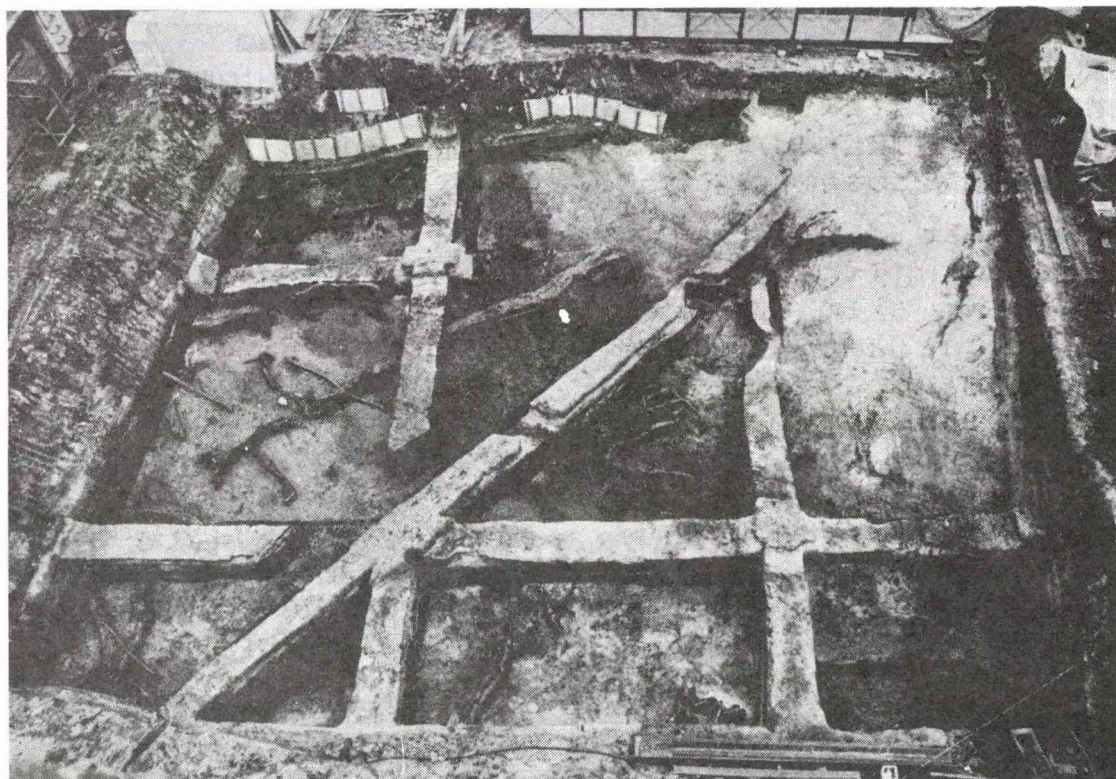


京大広報

No. 178

京都大学広報委員会



本年3月、北部構内・理学部物理学科の校舎建設予定地で
発掘された縄文時代の河辺林跡—関連記事本文2ページ—

目 次

岡本総長、ヨーロッパ諸国を訪ねる……………2

北部構内縄文遺跡の発掘調査……………2

<紹介>

薬学部附属薬用植物園……………4

<随想>

露伴の文章論……………名誉教授 岩村 忍……………5

防災研究所長の交替……………6

訃報・日誌……………6

＜大学の動き＞

岡本総長、ヨーロッパ諸国を訪ねる

岡本道雄総長は、5月3日から、文部省の委嘱を受け、我が国との学術協力および国際バカロレアの我が国の取扱いに関する意見交換を主な目的としてイギリス、スイス、フランスの3か国を訪ね、予定どおりの旅程を経て、5月15日無事帰学

した。

主な訪問先は、イギリスの教育科学省、サセックス大学、ケンブリッジ大学、スイスの国際バカロレア事務局(IBO)、インターナショナルスクール、フランスの大学省、パリ第5大学、パリ第7大学、経済協力開発機構事務局等であり、各訪問先においてはそれぞれ関係者との意見交換等を行ってきた。

＜部局の動き＞

北部構内縄文遺跡の発掘調査

京都大学構内遺跡調査会(会長 亀井節夫理学部教授)は、昨年11月1日より、理学部物理学科校舎の建設予定地(面積約650㎡)の発掘調査を始め、現地の調査をこの3月30日に終了した。

1 調査にあたって

調査地については、すでに昭和52年9月に試掘調査が行なわれている。その時に得られた資料からは、今までにほとんど明らかにされていなかった縄文時代中期と晩期の古植生を推測するデータが得られた。それは、現在の東山や比叡山にみるような、人の手の加わった二次林とはちがう、イチイガシを主とする照葉樹林が当時の白川の扇状地を被い、川沿いにはトチノキやオニグルミが生えていたということであり、今日、奈良県春日山原生林や京都市松尾大社裏山の森林で見られるのと同様な景観が推測されたのである。主要木であったイチイガシ、トチノキ、オニグルミの実はいずれもすべて食べられる堅果類であって、縄文人の主要食物であったと考えられ、試掘調査地点から出土した縄文時代の石器や土器からもこの地域ではたんに当時の自然植生を明らかにしうだけでなく、縄文時代における自然と人間とのかかわりを明らかにすることができる遺跡があると予測できたのであった。そのようなわけで、今回の発掘調査にあたっては、発掘を開始する前に協議を行ない、自然遺物の調査については、理学部動物学教室自然人類学研究室、地質学鉱物学教室第四紀および古生物学研究室、農学部林学科森林生態学研究室、大阪市立大学生物学教室植物学研究室、京都産業大学理学部物理学科の方々の協力を依頼することとし、多面的に発掘資料を分析できるような

調査体制を整えたのであった。

2 遺跡の立地と調査の概要

北部構内は、地理的には白川によって形成された白川扇状地の扇端部に位置している。縄文時代には、その地形は現在のように平坦ではなく、さらに古い氷河時代に削剝を受けてできた舌状の微高地が、今の北白川小学校附近から人文科学研究所別館の地点を通り、理学部宇宙物理学教室の位置あたりまで西方へ延びていたことがわかっていて、さらに、今回の調査で明らかになったことは、この微高地の末端を旧高野川が削っており、縄文中期では比高約3mの崖となって西へ面していたということである。この微高地の上には、点々と縄文時代の遺跡が分布している。すなわち、北白川小学校から白川通りにかけては縄文前期と後期の北白川別当町遺跡があり、人文科学研究所別館の東には同じ時期の北白川小倉町遺跡がある。また理学部植物園には縄文後期の京大植物園遺跡、旧農学部附属演習林事務室の建物の西に縄文中期の京大農学部遺跡がある。調査地は、この舌状にのびた扇状地の末端部と、旧高野川の河道跡に形成された後背湿地の部分にあたっているのである。

調査地の微高地の部分においては、遺跡はすでに現在の削平によって消滅してしまっていたが、後背湿地と崖の斜面には、良好な遺物包含層が残っていた。標高62.3mの地表面から、約4mの深さに発掘して、そこでは31層の堆積層のあることを確認した。そのうち、地表から1.5mまでの7層は平安時代以後の堆積物で、その下位の1.5m～2.3mまでの4層は弥生時代の堆積物、さらに2.3mから下の19層が縄文時代の遺物包含層であって、地表下約4mで地山にあたる砂礫層に

達した。

縄文時代の堆積物中には、植物遺体を包含する泥炭質粘質土層が7層あり、それらは縄文中期末から晩期のもので、大量の実、種子、材、葉などの植物遺体を含んでいた。また、これらの泥炭質粘質土層中には、いくつかの面によって分けられる立木や倒木が遺存していて、それぞれの時期の河辺林の樹種配置を明らかにすることができた(表紙写真参照)。現在、それらについては、切片をつくり顕微鏡観察によってくわしい樹種の同定を行なっているが、肉眼観察によるとトチノキがほとんどで、若干オニグルミが混じるという植生であったようである。

3 足跡の発見

立木や倒木が発見された縄文晩期の黒褐色泥炭質粘質土層の上面の発掘では、列状および群状に残された足跡を検出した。足跡の列は、黒褐色の粘土層の上に足跡がつけられた直後に流れ込んだ白い砂が凹所を埋めたために、黒地に白くくっきりとその形状が残されていた。それは、それぞれ長さ約21cmの足跡が12個ほど列状に並んだものであって、台地から北西の低地に向かって歩いた跡であることを示している。保存状態の良い6歩分について一括して石膏で型を取り、今後の研究資料としてとりあげたが、指の形態からみて人間の足跡である可能性が強い。ただし、熊の足跡かもしれないという可能性も若干残されている。また、群状に残された足跡は、前述の列状の足跡が

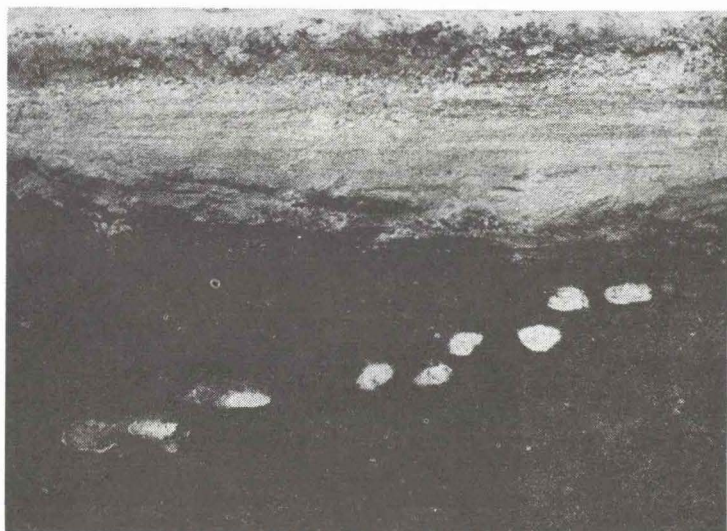
発見された層より1層下の面で検出された。それらは、個々については足跡とは認め難い点もあるが、自然の堆積では起りえない凹凸をもち、泥湿地に無数に踏み込まれた足跡群と考えられる。これらのことと関係して、調査地の南東には住居があったと思われるので、この湿地に、縄文人がトチノキやオニグルミを採集に來たり、水を汲みに來たことが当然予想できる。縄文時代の足跡の発見例は、足形の土製品を含め数例が知られているが、この時代の足跡列をそのまま型に取って保存した例は、今回が初めてである。

4 出土遺物と古環境の推定

表土～第7層の発掘調査では、平安時代以後の土師器、緑釉陶器、瓦などがコンテナに8箱分ほど出土している。弥生前期の土器は数片であったが、第12層以下の縄文時代のものについては、土の器と石器がコンテナに46箱を出土した。縄文時代遺物は、晩期と中期の遺物が主で、中期末ごろの滑石製飾玉は、西日本では初めての発見であった。

木の実・種子類、材、小動物の歯牙については調査地内の10か所で各層ごとに土ごとブロック採取を行ない、水洗篩別によって、現在、選別と同定を行なっている。発掘中に得られた実・種子類は、イチイガシ、トチノキ、オニグルミ、カヤ、ヒメグルミ、カエデ、ヒノキが同定されているが、植物の遺体の種類は今後同定が進むにつれて、さらに増え、それによって各地点ごとのそれらの構成の差異も明らかになるとと思われる。また、そのほか、花粉分析や放射性炭素による年代測定を行ない、古環境の復原やそれと実年代との関係を明らかにすることを試みている。

試掘調査の資料からは、縄文中期ごろ、当地はイチイガシが最も優勢で、照葉樹林もほとんど裸地を含まない極相林であったことが知られている。しかし、今回の調査によって晩期になるとイチイガシの林は後退し、代って初期成長の速い針葉樹のアカマツや、落葉広葉樹のコナラやアカシデなどが増加し、場所によっては草地や裸



検出された縄文時代の足跡

地環境も出現したと推定されるに至った。イチイガシはアク抜きなしで食べられるドングリで、この森林の後退現象は、ドングリに代わる食料の導入というような人為的なものとの因果関係があるのではないかという問題が新しく提出されることになった。このような現場の調査で明らかになった縄文時代の河辺林の構成、当時の人間の生活と動・植物とのかかわりなどについて、得られた資料をもとに、さらに同定・分析を進めることによって、その実態を明らかにして行きたい。

欧米では、1950年ごろから、低湿地遺跡の総合調査が精力的になされ、古代人の生活の実態が明

らかにされてきているが、日本では、この種の研究は最近になって、ようやく注目されるようになった。総合大学としての本学は、このような課題を持つ遺跡を構内に持つということからも、この種の研究を構内遺跡の発掘調査を通して、卒先して開拓していくべきであるといえよう。

今回の発掘調査にあたり、各関連分野の諸先生、諸機関からいただいたご援助とご指導に対して、感謝の意を表すると共に、今後とも、このような調査・研究に多くの方々のご理解とご協力・ご支援をお願いする次第である。

(埋蔵文化財研究センター)

<紹介>

薬学部附属薬用植物園

古来人間と薬との出会いは身近な植物を通じてであった。親から子へと引き継がれて集積した薬物の知識は、世界各地で民族薬・民間薬となって伝承されている。近年我が国の厚生省が承認した薬のうち、生薬・漢方薬製剤はおよそ3割を占め、またその他の化学薬品も出発点は天産物であったものが多く、現在もなお人類の健康に植物が果たしている役割は計りしれない。今後も植物から新薬物を開発する研究が続けられることはいくまでもないが、近年生薬・漢方薬に対する一般の関心が高まり、その需要が非常に増加してきている。しかし我が国で生産される薬用植物は限られており、自給率はわずか15%にすぎない。そこで栽培生産を増加し、品質の向上と安定供給を計るための研究推進も急務となってきている。

薬用植物園は昭和14年医学部構内にあった薬学教室の傍に小さな薬草園として誕生した。35年4月に薬学部が設置されて後41年に現在の薬学部構内に移転、さらに整備拡充を行ない、宇治構内にも用地を得て48年4月に薬学部附属研究施設として正式に設置された。開園以来薬用植物の蒐集・導入に努力が払われた結果、植物保有数はおよそ130科440属700種に達している。これらの薬用植物は吉田地区(3,042m²)と宇治地区(4,515m²)とに栽植されているが、前者は草本性植物を主体とする標本園、温室、試験圃場からなり、後者は木本性植物を栽培する薬木園となっている。標本

園には各地から集められた多数の薬用植物が栽培維持され、薬学生の教育のみならず来訪する内外研究者の観覧にも供されている。温室(163m²)では海外調査により集められた熱帯・亜熱帯産の薬用植物が鉢栽培され、すでに過密状態にある。さらにこの温室には本学部の特徴である組織培養室が設けられ、各種薬用植物の細胞・組織培養による医薬物質の生産やクローン植物の増殖に関する基礎研究が展開されている。また試験圃場では貴重な薬用植物の系統保持、研究・実習用材料の供給の他に、漢薬原料植物の繁殖、品質改善を目標とする栽培試験や育種研究が行なわれている。

薬用植物には個々に民族・文化・生態を背景とした歴史がある。それゆえ薬用植物園は“人間と植物とのかかわり”を医学的側面からのみならず、それぞれの自由な立場からも見つめることのできる場でもある。

(薬学部)



薬用ボタン…根皮(牡丹皮)は重要な漢方薬で、本系統は奈良県で現在も栽培されている。

防災研究所長の交替

5月1日、中島暢太郎防災研究所長の任期満了

に伴い、その後任として若林 實防災研究所教授（耐震構造部門担当）が任命された。任期は、昭和56年4月30日までである。（防災研究所）

計 報

岡本 利雄（化学研究所助教授・京都大学理学博士）

4月26日逝去、43歳。本学大学院理学研究科修士課程修了。昭和47年本学化学研究所助教授就任。専門は分子生物学。

重松 俊明（本学名誉教授）

5月1日逝去、73歳。本学文学部卒。昭和24年本学人

文学研究所教授就任、同28年から教育学部教授、評議員、教育学部長を歴任、同44年停年退官。昭和50年勲二等瑞宝章受章。専門は教育社会学。

西原 清廉（本学名誉教授・工学博士）

5月2日逝去、74歳。本学工学部卒。昭和20年本学工学部教授就任、同37年文部省大学学術局科学官、同39年本学工学部教授、評議員を歴任、同43年停年退官。昭和50年勲二等瑞宝章受章。専門は冶金学。

日 誌
(1979年4月1日～4月30日)

- | | |
|---|--|
| 4月3日 評議会 | 学、関係教官と懇談ならびに施設見学 |
| 〃 大学院審議会 | 17日 評議会 |
| 4日 名誉教授称号授与式 | 18日 国際交流委員会 |
| 〃 退官教授懇談会 | 20日 アメリカ合衆国エネルギー省核融合部 Anne Davis 氏来学、関係教官と懇談ならびに施設見学 |
| 5日 中華人民共和国中国社会科学院代表团団長、同科学院副院長 于 光遠氏外9名来学、関係教官と懇談 | 23日 体育指導センター管理運営委員会 |
| 9日 マレーシア国マラヤ大学長 Ungku A. Aziz 氏来学、総長および関係教官と懇談 | 〃 フランス大使館科学担当参事官 Daniel Jacquot 氏来学 |
| 10日 医療技術短期大学部入学式 | 24日 総長、職員組合と交渉 |
| 11日 学部入学式 | 25日 同問題委員会 |
| 〃 大学院入学式 | 〃 ドイツ連邦共和国ゲーテ研究所（ミュンヘン）Joseph Graf Raczynski 氏来学 |
| 13日 環境保全委員会 | 28日 名誉教授称号授与式 |
| 14日 大型計算機センター創立10周年記念式 | 〃 ドイツ連邦共和国デュッセルドルフ大学教授 Franz Grosse-Brockhoff 氏来学 |
| 16日 中華人民共和国中国風洞技術視察団団長、中国宇宙航学会常務理事 劉 柏羅氏外9名来 | |